

# いつきの“ヒューマン・ビーイング”

## 人権について考える ⑪

土肥いつき

京都の公立高校教員。24時間一人パレード状態のトランス女性。趣味の交流会運営で右往左往する日々を送っている。

### ふたつのキーワード

今号では、「普遍的な人権」がはじまる「小さな場所」を具体化するキーワードに「助けて！」と「あかんのちゃうん！」を選んだ理由と、そこに込めた思いを書くことにします。

わたしは数学の授業中、「問いを解く時間はしゃべってもええで、立ち歩いてもええで」頭で解けなければ、口で解け。身体で解け」と言います。なぜなら、数学が苦手な子がひとりで考えても解けるわけがないからです。すると、けっこうみんな動きまわって教えあいをしているのですが、ある時、ほんとうに数学が苦手な子が動いていないことに気づきました。「教えて」のひとつが言えないのです。それはなぜなんだろうと考えました。もしかしたら、そこには「教えて」のひとつを言いたくないプライドがあるのかもしれないと思いました。そういうプライドはジャマなので捨てればいいと、わたしなら考えます。しかし、数学が苦手な子にとっては、だからこそ、そのプライドは捨てられないのかもしれないと思いました。どうすればいいんだろうと思っていた頃、たまたまある障害がある人からこんなことを言われました。「車いすの人がまわりに手伝ってもらって目的地に行くのはかまわないのに、知的障害の人がまわりに手伝ってもらって問題を解くのはなぜダメなんだろう」。

この言葉は衝撃的でした。自分がいかに「学力」を個人のものとして捉えていたのかがわかりました。それ以来、「問題が解ける人間は、そのスキルを独り占めするな」と言うようになりました。

こういう話をするようになって、授業風景が少し変わった気がします。年度のはじめのうちは互いに牽制しあうような雰囲気漂っているクラスも、年度が進行するにつれ、数学が苦手な生徒が顕在化し、その子に数学を教える生徒があらわれるようになりました。

「助けて！」というキーワードは、このような経験から考えたものです。まずはじめに子どもたちに「『助けて！』は負けの言葉ではない」ということを強調します。すると、多くの生徒たちから驚きの感想が

返ってきます。きっと、生徒たちは小さい時から「人の手を借りずに自分でやれるようになること」をめざすことを要求されてきたんだろうと思います。だから、わたしは「助けて！」は自分がしんどい場所に置かれてることをアピールする言葉であるということ、まず伝えます。ただ、「助けて！」はそれだけでは言えません。例えば、端から見たらいじめられているとしか思えないにもかかわらず、本人は「友だちからいじられてるだけ」ということがあります。つまり、「助けて！」という言葉を使うためには、自分が置かれた状況を把握し、それが理不尽であることを見抜く力が必要であるということも伝えます。

そこで必要となるのが、もうひとつのキーワード「あかんのちゃうん！」です。誰かが「助けて！」と言えるためには、それが言える人間関係や社会のありようが必要です。それを「あかんのちゃうん！」で伝えます。例えば、いじめの場面を前にした時、「自分はしない」ではなく「あかんのちゃうん！」と言うこと。その延長線上に、例えばヘイトスピーチ・ヘイトデモへのカウンターがあること、そしてその「あかんのちゃうん！」が社会を動かし、いわゆるヘイトスピーチ規制法の成立につながったことを伝えます。

そしてもうひとつ大切なことは「あかんのちゃうん！」を誰に向かって言うのかということです。例えば、ホームレスの人を前にした時、ホームレスの人に向かって言うのか、ホームレスを生み出す社会に向けて言うのかということです。もしもホームレスの人に向かって言うならば、それは自己責任を追及する社会であり、例えば世界人権宣言の「社会保障を受ける権利」が認められない社会をつくることになります。それに対して、「あかんのちゃうん！」を社会に向かって言う行為こそが、世界人権宣言に書かれた権利を保障し、「みんなが幸せな社会」をつくるための第1歩であることを伝えます。

次号では、1年生1学期にとりくむもうひとつの教材、「多様性ワークショップ」を紹介します。